

編集委員会便り

今年、新年早々に阪神大震災による被害、そして3月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件が発生するなど、災害について深く考えさせられた年であった。また一方で経済の発展とエネルギーの大量消費は、森林破壊、絶滅する生物種の増加、酸性雨や温暖化といった問題を発生させており、長期的な地球規模での環境問題に対する不安が高まっている。自然災害から人々の身を守るために発展してきた科学技術が今、新たな災害を人々に産み出しつつある。

今月号の特集は「エネルギーと社会的リスク」と題し、様々な災害に対するリスクとその解決法について考えてみることにした。特集内容は、「エネルギー・資源」学会誌ということもあって“エネルギー”に係わるリスクを中心に企画することにした。最初に総論としてエネルギーシステムのリスク評価を取り上げ、大量のエネルギー消費に起因する温暖化問題と大気汚染・酸性雨問題の外部コストについて解説している。

次に災害について自然災害と人工災害のリスクの大きさを比較し、事故に対する安全性評価について述べている。そして最後に国や地域によってリスクに対する考え方の違いを文化的な視点から考察している。

どのような社会になっても、災害の全くない世の中などは考えられない。人間の歴史は病気や災害との戦いであり、そういった被害を小さくするために技術は発展してきた。21世紀に向け人口爆発に伴い、世界の環境問題は益々深刻になっていくことが予想される。大量のエネルギー消費で豊かさを享受する一方で、高まりつつある環境や安全性のリスクに脅える現代人…。今回の特集が、持続可能な社会の発展に向け、私たちが歩むべき方向を考える上で役立てば幸いである。

内山 洋 司
(財)電力中央研究所 経済研究所
技術評価グループリーダー)